

ことば科における絵本読み聞かせの幼小接続モジュール・シラバスの開発

田中真由美(武庫川女子大学 文学部 英語文化学科 准教授)

1. 研究計画立案の背景

信州大学教育学部附属松本小学校園では、平成28年度より文部科学省の研究開発学校として、幼小中一貫教育の推進プロジェクトが行われている。このプロジェクトの取り組みに、小学校1～3学年における国語と外国語活動を融合させた領域「ことば」の新設と幼稚園と小学校の接続がある。領域「ことば」は、①国語科の内容、②外国語活動の内容、③両教科等を横断する内容の3つの内容で構成される。本研究者は①～③の各内容を扱う単元のまとまりをモジュールと考え、③の国語科と外国語活動の横断的内容を扱う単元のまとまりをことば科モジュールとした。そして、絵本の読み聞かせが附属小学校と幼稚園で共に行われていることを踏まえ、「ことば科における絵本読み聞かせの幼小接続モジュール・シラバス」を開発することを目的に実践研究を行った。

2. 研究方法

信州大学教育学部附属幼稚園と附属松本小学校をフィールドとして実践研究を行った。附属小学校園で勤務する本研究メンバー及びALT (Assistant Language Teacher) が絵本読み聞かせの授業実践を通して、ことばの教育内容の整理、指導・評価法の開発、教育計画の構築を行った。教育内容の整理として、まず日本語の絵本と英語の絵本を収集した。その後、絵本で使用されている言語にどのような特徴があり、物語の内容に幼児や児童がどのような反応をするかを選書の観点とし、収集した本の情報をまとめて、「ことばの教育のための読み聞かせ絵本のデータベース」を作成した。指導・評価法の開発では、幼児や児童がどのように絵本の内容を理解したり、絵本やことばへの関心を高めたりするのかを明らかにするために、授業の観察とビデオ撮影、児童の振り返りシートの収集、アンケート調査を行った。絵本読み聞かせの指導実践のデータを踏まえて絵本のデータベースを加筆・修正し、「ことばの教育のための絵本読み聞かせガイド」を作成した。最後に、1年間の指導実践から得られた知見を基に「ことば科における絵本読み聞かせの幼小接続モジュール・シラバス」を作成した。

3. 結果と成果

「ことばの教育のための読み聞かせ用絵本のデータベース」は、収集した絵本を日本語の絵本と英語の絵本に分け、タイトル、著者、出版社、ページ数、語数・文字数、日本語版や英語版がある場合はそのタイトル、訳者、本の要約、ことばの学びに導く読み聞かせのポイントをスプレッドシートに入力したものである。

指導においては、読み聞かせの前の活動を行う段階、読み聞かせの段階、読み聞かせ後の活動を行う段階の3段階で授業や単元を構成し、英語と日本語の両言語を授業の使用言語とした。評価については、評価の観点を自己表現力、課題探究力、社会参画力の3観点とし、それぞれの観点に関する評価規準を絵本読み聞かせの単元目標に準拠して作成した。評価方法については、児童の発言やつぶやき、振り返りカードの内容を観察し、記述式で評価した。幼稚園での指導実践から、絵本の表現を自ら繰り返したり、内容の推測を行ったりするなど、能動的に読み聞かせを楽しむ幼児たちの姿が見られた。児童に関しては、絵本で使用される表現を自らの知識や経験と関連づけたりすることで、特定の文脈でことばがどのように使用されるのかを考えたり、登場人物の心情や行動を理解しようとしたりすることが分かった。また、日本語の絵本と英語の絵本の読み聞かせを継続的に行ったクラスの児童たちの中には、絵本の読み聞かせを楽しむためだけでなく、ことばの特徴を分析的に捉えようとしたり、ことばの学習に対する意欲を示したり、自らことばを学ぶための活動として捉えている児童がいることも明らかとなった。

以上の指導実践から得られた知見を基に、「ことば科における絵本読み聞かせの幼小接続モジュール・シラバス」を作成した。「ことばの学びに導く絵本の読み聞かせガイド」には、授業や単元を構築するための参考になるように、データベースの情報を、絵本の読み聞かせを行う学年の項目と作成したシラバスとの関連を示す項目を追加した。

4. 今後の課題

本研究では1年間実践を行い、実践事例基に、次年度に使用するシラバスを完成した。今後は作成したシラバスに沿って指導を行い、児童が評価規準をどの程度達成できるかを検証した後、その達成度に応じてシラバスや指導方法の修正を検討する必要がある。

共同研究者：堀内健、中村伸哉、佐々木淳、小野奈々子、濱島良太、目黒健太